

---

 書 評 Book Review
 

---

## A Field Guide to the Birds of Korea

Woo-Shin Lee, Tae-Hoe Koo and Jin-Young Park 著

LG Evergreen Foundation 2000年, 328ページ, 3,500円

価格はバードライフ・インターナショナル アジア地区委員会（(財)日本野鳥の会国際センター内）による頒布価格です

表紙を一目見ての印象は、「あ、野鳥の会のフィールドガイドだ」であった。中身をパラパラめくると、益々野鳥の会のフィールドガイド。それもそのはず、編集を日本野鳥の会の市田則孝氏が務めていた。イラストは日本のバードウォッチャーにはお馴染みの谷口高司氏が、解説文は Woo-Shin Lee, Tae-Hoe Koo, Jin-Young Park の各氏が手がけている。本書は英語版と韓国語版が出版されており、英語版としては初めての朝鮮半島全域の鳥類フィールドガイドである。大きさはおよそ縦17cm×横12cm×厚み2cmで、ダウンジャケットなどの大きめのポケットにはすっぽり入ってしまうぐらいのコンパクトサイズで携帯にはすこぶる便利である。

各種の名称は、学名、英名、そして韓国名（ハングルではなくアルファベットで表記）が示されている。掲載種は450種で、2000年8月までに朝鮮半島で記録された鳥種全てが網羅されている。実際にフィールドガイドをめぐってみると、そのほとんどは日本でも記録されている種であり、改めて日本との距離の近さを実感させられる。しかしひとつひとつ見ていくと、まだ日本国内では観察されていない種を見つけることができる。日本の、特に日本海側で鳥見をしているバードウォッチャーたちは、「いつかはこの種を日本で！」と思いを馳せながら楽しく眺めることが出来ると思う。朝鮮半島で迷鳥で記録され、日本ではまだ観察例がない種は、いずれお隣の日本にも迷行してくるかもしれないので、珍鳥派の鳥屋には特に参考になるだろう。イラストは、当然ながら朝鮮半島に分布する亜種が描かれており、例えばカケスは亜種ミヤマカケスが描かれている。日本で普通に見られる亜種との微妙な違いを見つけて楽しむのも面白い。巻末には朝鮮半島のバードウォッチングスポットが47ヶ所にもぼって図示されているので、韓国へ鳥を見に行かれる方には本書は非常に役立つだろう。

カラー図版は120枚で、1ページに3-5種が描かれている。羽衣の特徴から区別できる種については、雌雄、幼鳥、若鳥が描かれている。他種との主な識別点には矢印が示されており、分かりやすい。羽衣の特徴や体型等は、さすが谷口氏のイラストだけあり非常に正確かつ美しく描かれている。ほんの一例だが、ウミウとカワウの翼の位置の微妙な違いや、トウネンとニシトウネンの脚の長さや嘴の太さの違い等々が小さなイラストに正確に描かれており、素晴らしい。全体を通して雨覆や肩羽を若干省略されて描かれているのが残念だったが、ハンドブックの宿命でどうしても一羽をかなり小さく描かなければならなかったためであろう。色彩については、全体的に若干薄めな印象を受けた。例えば水鳥については、谷口氏が同様にイラストを手がけたフィールドガイド、「A FIELD GUIDE OF THE WATERBIRDS OF ASIA」よりも、色の濃さについては本書のほうが薄くなっている。これが印刷の段階の事情なのか、著者らの意図するところなのかは不明であるが、「~WATERBIRDS OF ASIA」の方の「濃さ」の方が個人的には好きである。解説文はシンプルかつ適切に書かれているし、略記（Resident を Res, Summer Visitor を SV 等）を多用して限られたスペースの中でできるだけ多くの情報を盛り込む工夫がなされている。情報量は野外で用いる図鑑としては十分だと思う。各種については、分布域が図示されている。分布は繁殖期（ピンク）、越冬期（黄緑）、そして周年観察される地域（茶）について色分けして示されている。スケールは朝鮮半島を中心において東北アジアが収まるものがほとんどである。いかんせん朝鮮半島自体が狭いので、分布域の図は、半島内での詳しい分布を見るというよりはその種がアジアのどこで繁殖し、越冬するかというのを知るために有用であろう。

出版元である、LG Evergreen Foundation (LG 常緑財団) のチェアマン Bon-Moo Koo 氏、著者代表の Woo-Shin Lee 氏の前書きは、共に韓国での急速な環境破壊を憂いている。周知のとおり、韓国では大規模な開発が進み、多くの良好な森林、干潟や湿地が姿を消しつつある。朝鮮半島は三方を海に囲まれ、オーストラリア、ニュージーランド、南アジアからシベリアへと至る渡りのルートとなっており、多くの鳥種の保全に関して地理的に重要な位置をしめている。朝鮮半島から良好な自然環境が失われると、渡りの中継地を無くした多くの鳥種に破滅的なダメージを与えるに違いない。著者らは、たくさんの人が本書を見、多くの鳥の名前を学ぶことをきっかけとして、その生態に興味を持ち、生息環境の大切さを知って欲しいと願っている。こういうことが凶鑑の冒頭で訴えられなければならないこと自体、韓国での環境破壊の深刻さを物語っており、とても悲しくなるが、著者らの願いどおり本書が朝鮮半島の環境保全に役立つことを願う。

山口 典之 (九州大・院理・生態科学)